古今和歌集打聽

憲 一三三

五

五

古今和歌集巻第十一打聴

恋の歌一

万葉にハ男女の相思ひ合ひのことなし寸親子ハ手明
友(ガキ)の相思ひ合ひを作(ヨメ)るまゝ但しまゝ相思(アヒギコエ)と見して紹と分
てり恋と云て男女の中のこれ命とするハ此集が始
也然(サテ)紹をたつるにハ雑れ所ぞ会のうるべきことなり二
実とし恋を五事とするハ故事なるべきことなれど
此るんばく序にも出れ者但恋にハよき奇会のさ
坂五事となれるとしく述ら国にても上代にハ恋れ
奇会のありし世後人のんに表裏(ウラウヘ)の出来てよりかく
ていふぬをよしと寸仍てしたハ代に治ぎたしての
たとゝりを無くぬ人ハ恋をバたられるものとなる
て流(コト)真れまぎりなる事を考へぬし

無れ所万葉にも
此集にも恋を
うれ人のんれ
となれバ恋のみ
きるしらるのこ
をなるべくなるな
らつる人ハ恋といへバ
男ぶるしひもなる
ねくひうくせりい
まへハ人のんをうく
して表のことをよく
するすハなりしこ
くせバ必ずしさん
ぐせれつまなる
しよて此無れ奇
の会のよいまし
人のんれ相張れ
もと云るべし

いはんらめく然れば吟ても見ても即思ひうむるに
此事を命を待ちぬ載る様(タメシ)よりてんにはるに年経
てこゝそ志るべこゝ求されどもやくて今回は蕃く
よりて今事は用ゐらり余でしき云回もるさりしの
なれば志れ策めぐらを考るに始るは何れ
ちも思ひさぶめぬほどをいひ其後は書に吟より
恋る間(ホド)をいひ此命は年経ることもせよ云おもひ
初し時をいへば是又初恋年次此後なるは嫁を求
めていひよらんまぐるの其後には書にのこ吟て
としを経るときを待いてふりといへり

藤原れうちれん

志ら浪のあとなきうらそ切毎も泥ぶたまりの志
数ぐなりける

風を嫁になぞらへて中立をもてまぐ志らぬ人はいひ
初るを似ぐなるまゝ思ひそ詠なる波の上とも風を
志るべきして毎れ切めくまゝ志らぬ人なりとも
し家べあるうらいひよるぞといひ詠うち寸来べし

在原元方

おとさ山青年吟詠あふ詠の此算のさなるに
としをふるの形
青羽山は遠近れ西南に詠ぐまて実より西は山科之
されば山しなれ青羽山ともよめり所は青に此吟
て何ちて年経るとゝんをうれ地名ふる所あは
せてよみらるし
たちの聖りあれとぞ思ふよそ何ても人にさ何を
おなり川しら波

続古今集に水草ねてありとも見えぬ沼水のみれ
ところをしる人ぞなきん明らかに
おもひてよぞこんこゝに山表れこゝへぬ山そおもし
とぞおもふ
塚撰に此歌を載て詞書に返しせぬ人に法ありし
ゆゑとゆゑし甚かへし　山表れ高のこゝにくとひ
ゆゑばむ面しきこゝにゆゑやかへらん此姫答
まてよくゆゑなり
其後ゆゑするものにもゆゑ恋そくるしさものと
人にしらせん
家人とつれなき人れんとを雨かへらるゝ掬なるゝバ家
行恋れ苦しさをおぼししらせんとくんとうつると
言ひ其後にしは公庵齋嬰といへる二人の者病有

て扁鵲と云醫に治を求む二人なるゝ既に愈てり扁
鵲云曩の病は某石れ殆あり粗生と偕なる病有
てこゝ連れ鬢とともに長せり是をも攻めはさせ
んとて二人に毒酒を飲しめて三日だゝり死せる事に
二人が胸を割て心をとりかへて後神業をもちぬてさ
ましめたり是は公庵と云人れ志は法よられど其家よ
わしなる深ありて是を勤めあへざりけり亦齋嬰は
志は弱られど筆力つゝかりけり故に思ひたゝり後く
なくて後にみこゝちなるをやがてんをとりかへられし
バ志家俗に均しく家にけりとこゝ列子と云書に
見えたるを今はとりあるなるべし
よしてこゝれば公新しいを紐乃おなじ云ふ
いざむほびてん

りけるを約めていへるしかれども時ハめぐりもてゆくさまいとせめて恋しきにこれをかしてうつさんとて

[illegible]

秋風の吹きうらみぬれば

素性法師

秋風吹て肌さむき夜をつゐに独ねんとや

[illegible]

秋風の吹きうらみぬれば

[illegible]

万葉を遠にいなき細にのことをつぐしともよめり

日紀に夫を法ぐしれもとより難波に法きて河尻に入とありこれが難波で澪極（ミヲツクシ）の故なるをかけておの法ぐらかざりたる相乃やうにひ来れといひたるにて もあらべき相し法らバ言語に法をてよむべし

新撰万葉に二の句残の浦にとあり又一本身をつくしてぞとあるはよろし

志ぬる命いきかやそ法と云ふに玉の緒だらりゆえんといたるむ

そこにつれなきに死ぬべき命れ志ばしあひ見ずそし生きやまさると誠に志ばしがほどをもいふんといへうしと思ひくげをれてよめるし新撰万葉に法ぬ恋な命もいくやとあり六帖に末の句あひ見てしが面とあり玉の緒だらりハ志ばしれほどこそにいへり万葉にきぬらくハ玉れ緒バかり恋しくハ来じ乃言根乃略沢れ如（ヨ）とそふも志ばしれんにまよめり

俗ぬれバ志ひてもほまんと思へども愛てぬそれで人だれ見なれ

そハなきれぶにせざやと志ひておもへど愛といふ相ありてなるものにあらつるぞ生愛ハ人だのこれなる相まずありけるとこそし人だの名ハ人だのこれなるといふるし

或抄に云詞花集に俗ぬれバ志ひてもほまんと思へどもんまくもおつる涙のとあるハまたく今の句れ上の句にて下の句ハ下に蓋世に此の句に法れなきをいふハ意じとおもへどもんよけくも落る涙のとこそ二首れ上下をとりあらせて一そうになせしし何人れ志るぞ事のあらんいかにしてこの撰集にハ入られけんといふり詞花集れるすしにハ用なれど事の法いでにいたれ事ハぞうにあらぐるし

事理なくもぬてもさめて母悪しきがんをいぼちやうバ和まられん

なくうくそぐ袂ぞある涙（つゆ）あるみを
もみぢ葉といふりたる涙の玉ぬきとめしみるとい
水清し
ゆふ波やたくらんもひぐらかよくる秋のひ
ぐれかなはつ
夢後のものうき秋よ浪やたくらん寂もひぐら
きのうぐれかそうぬくしき後ハ夢ぬきかうへとも
ひぐらき泪書おくよいふり
まつ虫ぢ師
きのふ今とて夢のいも人をそ夜ふけまつ虫時ぞ
きくらかりける
けさきくハいつくさく夢よりもうくもあ
ふ人をうき花そぐりをくくて暮れをぐくとも

この句よりハ秋のうれ
夢後よりおもそおさ
きくらかりけるうつる秋ひぐ
けさ今をとくそ
うれせるうや

この句よりハ夢ぬきかうへとも
ひぐらき泪書おくよいふり
まつ虫ぢ師

きのふ今とて夢のいも人をそ夜ふけまつ虫時ぞ
きくらかりける
けさきくハいつくさく夢よりもうくもあ
ふ人をうき花そぐりをくくて暮れをぐくとも

この句よりハ夢ぬきかうへとも
ひぐらき泪書おくよいふり
まつ虫ぢ師

きのふ今とて夢のいも人をそ夜ふけまつ虫時ぞ
きくらかりける
けさきくハいつくさく夢よりもうくもあ
ふ人をうき花そぐりをくくて暮れをぐくとも

この句よりハ秋のうれ
夢後よりおもそおさ
きくらかりけるうつる秋ひぐ
けさ今をとくそ
うれせるうや

十二

古今和歌集 巻十三おぎ

憲の命 三

屋よひの法いたちだうり。今の女法いたちより 志のびよ人を
抱らいひ〳〵ぶちに雨のそれぶ事を法によみて法
ハしを法

在京 業平 紀長

抱らそてとハ寝てるすをもいへど篇目をとるはなはら
法ともたらしバされたハ抱いひ うちをる歩べし抱ら
を抱をとせてるもあれどいまへにあらぞらハなど
とそれ同じく助けるから他をもうね分ハ寝すを法
だのよいたぬまを可ふ詞しそほづるハ俗に志
ぼくふるとそして万葉に伊松袁のおのれ神さび
青き云れたる門日法しく小雨それぶるとあるまて
小雨なるすを志るべし

いせ抱法にハお
抱ぐらひてかへ
り来て時ハやよ
ひのつゝちの面
のうほぶるを
やりたると有て
志を法くりま
せしものし

或説に法降まて
かりうふ言ふと
言ハいへし
若根のいたるし面
と云れ志ながら
くしとふる面し

十三

於きもせずで寝もせでしよ海をつかして、まれ物
とてしなくがめくらけ
[illegible]と日を経て見ひやるさをといへりなるが
ハ其れ霊面（ナガアメ）に相見ふなくがめとこれていなるし
なりしこれ鈴屋の家に侍る女のもとにしよん
て清くのいしたれ

敏行朝臣

いせ物ならよりて此女と業平の妹くしといへれどもいふにしこの有べきを家に侍りける女しとて妹くしともやうなれど彼物語ハ俗ことを書く俗りなせし物なれバ証となりがたし

清まぐのなくがめにてさ海渡川神のまぬれてあふ
よしもなし

是も霊面（ナガアメ）に相見ひれなくがめ代にあらり清れぐと浮
なが雨に渡川の名をさりて源れバ行ふらんて

人丸のこの万葉をよくしん人ハ歌詞をさらしてしておのれ[illegible]

歌者も又雲とくもに消ん物をとくしたてらるにも
注ありて此言ハ或人のいたく柿本人丸がなくと
いつり是もさらべからば詞づかひ志らべれさる人
の歌にハ物をつかぬものぞ

なりひらの朝臣

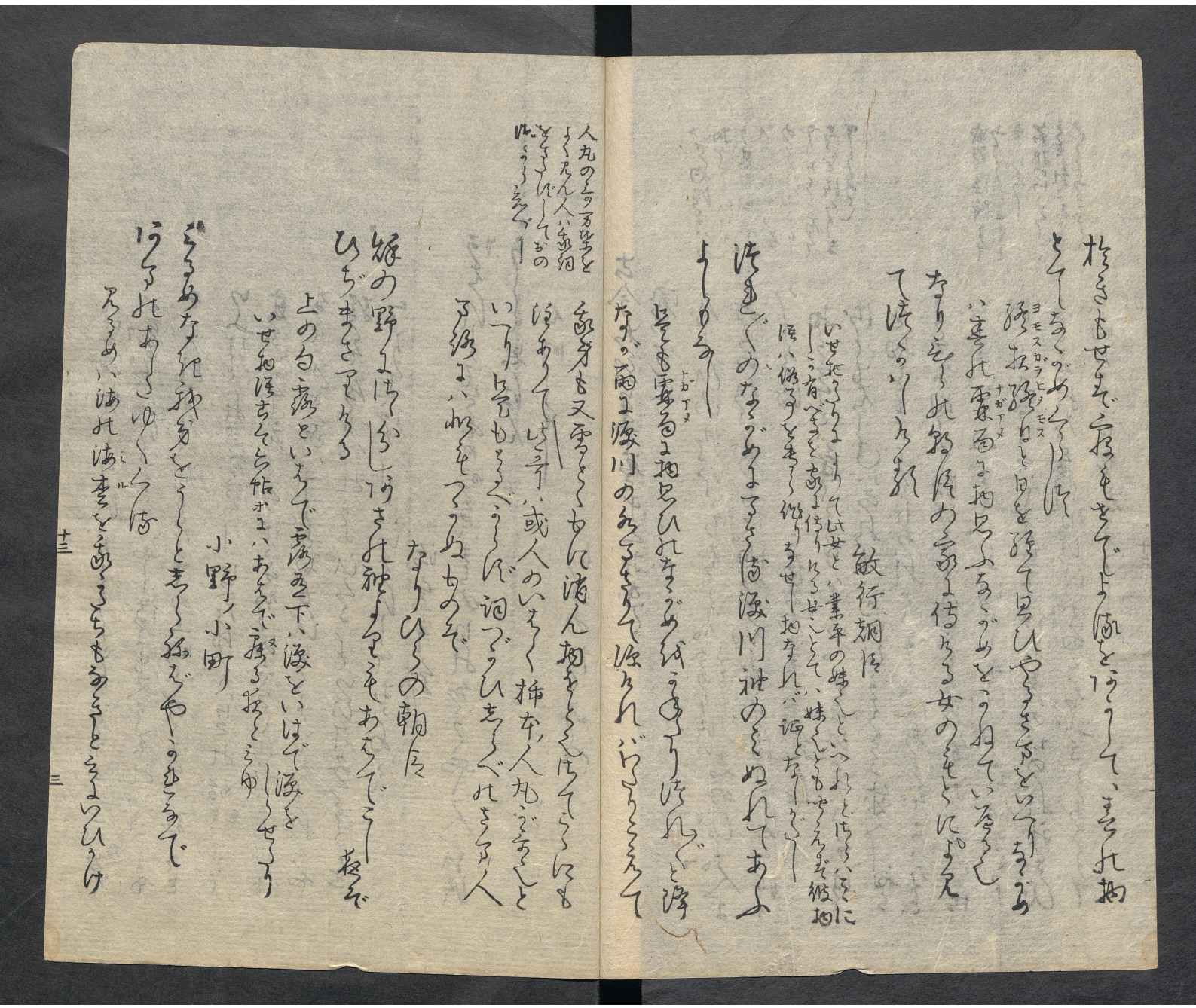
姫の野に清ふしけされ神よりもあたでこし
ひぢまさりをする

上の句霞といたで霞を下ハ渡といはで渡を
いせ物語古くら帖ガにハあたで寝る様とこゆ

小野ノ小町

ぐるめなれ我身をうしと志らねどやこの世なるで
けるれあしきゆくへ海

見るめハ海れ海（ミル）者を歌ふちもなきとこよいひかけ



十三

純友則

それなるのいろにはいでじこそれぬのしるこのよひ
てこひ者しぬとも
これぬハ漂沼にて若なるとも生成りしる沼も下に
かくひてハたがひのみれ下にかくふし恋ハ死ぬとも
ハ人めにはそりて思しきあるりを思ふこのかとも
だいしらぬ
美つ孫
冬れ池にすむにかゝ冬れつれかなくろさにこしふを
人にしらんな
冬冬れ庭にかゝふと白を論ふるも清もまなくハ思ふ
る乃つれなくて河もぐしけてうつく思ひて冬どりふ
冬庭にかゝひて見れぬ如く人にしらせなとも
清ハ此紫におく初雪れ者をはもこ志みハ清くとも

冬紫にいふこれ
清のなるに雪そ紅の
色なる出そ知もひ
しるとも

清撰にかゝひ
入て田の白下にか
まちんとあり

亀にいでめや
春をこそみハ夜代はもしくて志ハ清くともそ
深つくし物を深きバ冬ちなる代はの紫ん
雪れおくにさ痕ハつきなから松色れこゝろぬハ
乗思ひの切なるにうくて清て志かり此色にハ出といふり
よみ見しらず
山しなれ青羽乃山の青にぞ人れしる色くりが
こひめ〳〵のこそし
冬ハ名にたつぞかりハ急せじよく思ひてこゝろんと
こそし青にしてハ音にもどろぞ如しだにもそ詞を
こゝろく言はぐしこの源に問ふある人にかゝれ
うねめれとなんやしにといふり例のとしに
こそよいられふのやが

清水書店
立川市幸町6－2－1
TEL 042(534)2443
¥ 4500

伊勢物

No.

東京堂出版 (20×10)

Loose Item